

## 分娩件数が減少した産科混合病棟で働く助産師の 仕事へのやりがい

山根 真由美 (Mayumi YAMANE)

### 【目的および背景】

分娩件数の減少に伴い、産科単科での病院経営は困難を極め、現在産科混合病棟の割合は77.4%と増加傾向にある<sup>1)</sup>。このような背景の中、産科混合病棟に勤務する助産師が受け持つ患者は、産科患者に加え、他科患者を同時に受け持つという現状があり、正常と判断された妊娠・分娩・産褥期や新生児期にある患者ケアの優先順位が低くなると予想されている<sup>2)</sup>。小柳ら<sup>3)</sup>は、産科混合病棟であるために「お産に集中できない」「他科の患者ケアに要する時間が長い」などの産科混合病棟の現状を問題視しており、助産師としてのモチベーションの低下を誘引する現状があるということを示唆している。また、助産師が助産以外の業務を担うことは、専門性を十分に発揮できないジレンマを感じるとも言われており、産科混合病棟に勤務する助産師の助産師としてのやりがいに大きく影響を与えていると考える。

産科混合病棟における助産師の研究としては、労働環境の実態や職務意欲向上に必要な要因、職務満足についての研究がなされている。しかし、産科混合病棟で勤務しながらどのように仕事へのやりがいを見出しているのかという過程に焦点をあてた研究はない。

そこで本研究は、産科混合病棟で勤務する病棟助産師を対象に、産科混合病棟においてどのように助産師としての仕事のやりがいを見出しているのかを明らかにするものである。これにより、産科混合病棟で勤務する助産師の職業的アイデンティティの変化や、産科混合病棟化における助産師の役割を考える示唆になると考える。

### 【用語の定義】

助産師の職業的アイデンティティとは、佐藤ら<sup>4)</sup>の定義する「自分は助産師であるという自己同一性や助産師として専門性をもって働くことの意味や価値の認識」とした。

○共同研究者・協力者 前田 隆子 (鳥取看護大学 看護学部 看護学科)

### 【研究の概要】

1. 研究対象者  
産科混合病棟に勤務する病棟助産師で、助産業務を行っている者（助産師資格を有するが助産業務を行っていない者は除く）。
2. 研究方法  
インタビューガイドに基づいて半構造化面接を実施した。面接中の音声は研究対象者に同意を得た上でICレコーダーに録音した。インタビュー時間は30分程度とした。
3. データの分析方法  
得られたデータを逐語録におこし、コード化し、カテゴリー化する。

## 【結 果】

研究対象者は、30歳代～40歳代の助産師で、助産師歴7年～27年の4名であった。産科以外で受け持つ診療科としては、婦人科、整形外科、総合診療科、外科、眼科、泌尿器科、小児科であった。病棟勤務以外に産婦人科外来での保健指導、助産師外来なども行っていた。いずれの研究対象者も、分娩件数が減少してきていることを認識していた。

現在、インタビュー内容をカテゴリー分析している途中段階にある。

インタビューでは、病棟助産師は産科以外の他科を受け持つことが多くなり、妊婦・産婦・褥婦・新生児に対し関わるのが少なくなっていることで助産師としての満足感・幸福感が得られない状況があった。正常な経過を歩んでいる妊婦・産婦・褥婦・新生児よりも、他科患者への看護の優先順位が高くなり、特に産褥期における育児支援に大きく時間を確保できないジレンマを感じていた。

しかしその中でも、同僚の協力を得ながら、妊婦・産婦・褥婦・新生児のケアに集中できる環境を確保するなどして助産業務を行い、助産師としての役割を果たしていた。また、分娩件数が少ないことをネガティブに捉えるのではなく、分娩件数が少ないことで一人ひとりと大切に関わることができるというメリットも感じており、自分たちを頼ってくれる女性やその家族のために助産師として寄り添う姿勢を持つことを大切にしていた。妊婦・産婦・褥婦・新生児に対する関わりが減少することで、「助産師であるのに何をやっているのだろうか」「助産師であると胸を張れない」と助産師である意味を自問自答するなど感情の揺らぎが生じる研究対象者もいたが、いざ妊婦・産婦・褥婦・新生児を目の前にすると、自分は助産師であるという信念に支えられ、助産師であり続ける事に意味を見出していた。

助産技術の維持に焦点を当てると、分娩件数が減少したことで症例数が減り、助産技術を維持していくことの難しさや、後輩たちの助産技術の維持をどのように確保すべきかという課題もあがっていた。先輩助産師として、後輩助産師のサポートをすることや、頼ってきてくれる女性たちをサポートできるように、常に技術を維持・向上していかなければならないという語りもあった。

## 【課 題】

分娩件数が減少し他科患者を受け持つことが多くなったとしても、限られた数の妊婦・産婦・褥婦、あらゆる年代の女性やその家族に対し寄り添い続けることに助産師である意味ややりがいを感じているのではないかと考える。やりがいを支えるのは、自分は助産師であるという信念であるように感じられる。

今後は、得られたデータをさらに分析し、産科混合病棟における助産師の仕事へのやりがいを明確にしたいと考える。

## 【引用・参考文献】

- 1) 吉川久美子 (2018). 産科混合病棟のなかで助産師にできることー産科混合病棟の現状と目指すべき方向性ー, 助産雑誌, 72(4), 246-252.
- 2) 日本看護協会 (2017). より充実した母子ケアのために産科混合病棟ユニットマネジメント導入の手引き, 公益財団法人日本看護協会発行.
- 3) 小柳弘恵他 (2016). 混合病棟に勤務する助産師の労働環境に関する課題, 母性衛生, 57(3), 210.
- 4) 佐藤美春他 (2011). 助産師の職業的アイデンティティに関連する要因, 日本助産学会誌, 25(2), 171-180.